

# Whoops!

2017 AUTUMN Vol.17



多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行

TAKE  
FREE!!!



小国和紙 ～新潟の雪が生み出す伝統～

---

平野暁臣特別講義

《太陽の塔》はなぜ大屋根を突き破ったのか

渡辺真也が語る「ユーラシア」 / 小池一子特別講義 / アルチンボルドの寄せ絵

スヌーピーミュージアム誕生秘話 / アートの街銀座の表と裏を見る

"QUOTATION" / 「多摩ニュータウン」が音楽のオリジンにー DÉ DÉ MOUSE 遠藤大介

「筋目描き」に伊藤若冲の神髄を見る

### 3 Tamabi Report

《太陽の塔》はなぜ大屋根を突き破ったのか

／平野暁臣さん

ミューラシア、探しの旅に出る

／渡辺真也さん

美術の世界で起きている生の状況を見せる

／小池一子さん

### 6 Whooops! 見聞記

アートの街、銀座の表と裏を見る

スヌーピーミュージアム誕生秘話

アルチンボルドの寄せ絵に皇帝の力を見る

小国和紙 新潟の雪が生み出す伝統

### 14 Special Interview

DÉ DÉ MOUSE 遠藤大介さん

／「多摩ニュータウン」が音楽のオリジンになった

### 16 zoom up

雑誌“QUOTATION”

／世界のクリエイターのインタビュー記事で誌面を構成

### 18 Whooops! 考

「筋目描き」に伊藤若冲の神髄を見る



(上) 新潟県長岡市で生産が続く小国和紙→P.12

(下) クリエイティブ誌“QUOTATION”の蜂賀亨編集長→P.16

Whooops![ ウーブス ] 2017 AUTUMN Vol.17

発行日= 2017年 11月 03日

編集長=小川敦生 (多摩美術大学芸術学科教授)

編集・誌面デザイン=笛木一平、松澤遼、棕田大揮、山田浩子、板垣万由子、佐藤隆之、青木真梨恵、新西光之介、野田美紗子、小川敦生

表紙レイアウト=野田美紗子

表紙写真= DÉ DÉ MOUSE 遠藤大介さん (→P.14)

発行=多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

印刷=株式会社ハシモトコーポレーション

問い合わせ先= aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webmagazine「タマガ」= QR コード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



Whooops! について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。誌名「Whooops!」は、「あっ!」という驚きを表しています。あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。そんな思いを込めて制作しました。お読みいただくうちに小さな「あっ!」が生まれてくれますように!



# 《太陽の塔》は なぜ大屋根を 突き破ったのか

平野暁臣さん (岡本太郎記念館館長)



岡本太郎の代表作《太陽の塔》。完成から半世紀近く経つ今も威容を見せる。これからも多くの人に愛され、語り継がれていくだろう。しかし制作の紆余曲折については、実はあまり知られていないのではないのか。7月27日、本学八王子キャンパスで開かれた岡本太郎記念館館長の平野暁臣さんの特別講義は、「《太陽の塔》が何を表しているのかはまったくわからない」という言葉で始まった。

「芸術は爆発だ！」……もはや知らぬ者はいないであろう有名な岡本太郎の言葉だ。このキャッチーなフレーズをそのまま具現化させたような作品として有名なのが、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会を象徴する《太陽の塔》である。高さはおよそ70メートル。白を基調としたボディからとがった腕のようなものが伸びている。正面にはかわいげのない赤子のようにふてくされる歪んだ表情の顔と、塔の先端で鋭い眼光を携える黄金の鳥面のような顔が上下に2つ並び、背面の下部には黒い顔が描かれている。全体としては明るい色使いながら、楽しいというよりも不可解な印象を抱かせる。

講義の最初に平野さんは、「《太陽の塔》が何を表しているのかはまったくわからない。それは解釈が無限に存在するということだ」と言った。確かに《太陽の塔》について太郎自身は詳細を語っていない。だからこそ残った謎が、大きな魅力になっているのだ。

では、なぜ《太陽の塔》はここまで有名になったのだろうか。それは若い世代からは少しイメージしづらい、1970年に大阪で開かれた『日

本万国博覧会』の成功とも深く関係していることがわかった。世界最初の万博は、1851年にロンドンで開催される。技術の発展が著しい時代に世界中の珍しいものを1箇所を集め、全世界に向けて展示することを目的として始まった。イギリスで開催されたのは、蒸気機関の発明に象徴される当時最先端の技術力を持つ国だったからだ。技術の進歩が人類を幸福にさせ、夢の未来、を開くと認識されていたのだ。

その後オリンピックに並ぶほどの国家行事となった万博を開くに当たり、世界を驚かせるような展示を熟考した日本政府は、太郎にプロデューサーの依頼をする。

平野さんによると、太郎は当初拒否していたそうだ。しかし、断りつつも頭の中にはイメージがあふれていたという。残されたスケッチからも、受諾する前の段階から《太陽の塔》らしきものを構想していたことがわかる。また、建築家の丹下健三は大屋根の建築物を構想していたが、その模型を目にした太郎は「この世界一の大屋根を生かしてやろう」の言葉を残し、やはり受諾する前の1967年6月26日に描いたスケッチに、大屋根を突き破る塔の姿を残した。他作家の作品に穴を開ける大胆な発想を実際に強行する実現力。太郎にしかなしえなかったのではないだろうか。

「人類の進歩と調和」という万博のテーマに対しては、「ぶつかり合うことが調和だ」とい

う言葉を投げかける。太郎は「対極主義」を唱え、融合させて美しいものを作るよりも強い火花を散らして対立させることを好んだという。大屋根を突き破る太陽の塔は、まさにその考え方を体現している。しかもそれは錯誤をひき起こさず、最初から突き破ることが想定されていたのではないかと思えるほどの均衡が保たれている。

技術の進歩がさまざまな社会問題をも生むことが明らかになった今の時代に明るい未来を描くのは必ずしも容易でない。それは、現代人なら誰しも感じることだろう。「進歩」は礼賛するばかりでなく、突き破る必要もあるのではないのか。そんなことを教えてくれる講義だった。

取材・文・撮影(\*)・レイアウト＝青木真梨恵



平野暁臣(ひらの・あきおみ) 岡本太郎記念館館長、空間メディアプロデューサー、株式会社現代美術研究所代表取締役、日本イベント業務管理者協会名誉会長。岡本太郎のパートナー、岡本敏子の甥。1959年東京都生まれ。横浜国立大学大学院博士前期課程修了、工学修士。著書に「万博の歴史 一大阪万博はなぜ最強たり得たのか」(小学館)、『岡本太郎 ～「太陽の塔」と最後の闘い～」(PHP新書)



岡本太郎が残した《太陽の塔》のスケッチ



# 『ユーラシア』 探しの旅に出る

渡辺真也さん (インディペンデント・キュレーター、ベルリン工科経済大学講師)

7月28日、本学芸術学科の装飾デザイン調査設計ゼミで特別講義が開かれた。ゲスト講師として招かれたのは、ドキュメント映画『SOUL ODYSSEY - ユーラシアを探して』の監督、渡辺真也さん。旅をして探した『ユーラシア』とはいったいなんだったのか。講義は、美大生にも身近なアーティストの話から始まった。



「ヨーゼフ・ボイスとナム・ジュン・パイクをご存知ですか」

講義の初めに渡辺真也さんは学生たちにこう問いかけた。ドイツ出身のボイスと韓国出身のパイク。どちらも著名な美術家だ。二人は生涯を通じて『ユーラシア』という名のコラボレーション作品の制作を続けたという。作品の根底にあるのは、「ヨーロッパもアジアも同じユーラシア大陸というひとつのもの」という考え方。渡辺さんは、以前アメリカでアジア人の自分が見下されていると感じた時にこの作品に出会い、救われたという。そして今度は、自分で「ユーラシア」探しの旅に出るのである。

この日の講義では、渡辺さん自身が旅をして撮影したドキュメント映画『ユーラシアを探して』の第8章が上映された。舞台はロシアのイルクーツク。印象的だったのは、バイカル湖にあるオリホン島に住むブリヤート族を取材した場面だ。渡辺さんは日本人のルーツのひとつがブリヤート族なのではないかと考えていたという。ところが、実際に会ったブリヤート族の人々は、彼らのルーツが日本人だと考えていたのだ。はたしてどちらが本当のルーツなのだろうか。上映が終わって渡辺さんに改めて尋ねると、「手をたたいたときに右手と左手のどっちが鳴ったか」といって、どっ

ちも鳴っている。それと同じです」という。両手があるから音が出るのである。ルーツがどちらかを探るよりも、ルーツは同じと考えることのほうに意義があることを学んだ。ブリヤート族と日本人が通じていたことは、内容が極めて似た伝説があることからも分かるという。ある男が女に変身した白鳥と結婚し、間に生まれた11人の息子が彼らの先祖であるというのが、ブリヤート族の白鳥伝説だ。似た説話があるのは、なんと渡辺さんの出身地・静岡だった。世阿弥が能で演じたことで知られる『羽衣』である。

講義の中で取り上げた、「木曜日」に見る世界のつながりの話も興味深かった。木曜日は英語でThursday。日曜日=太陽=Sundayや、月曜日=月=Moon=Mondayと比べると、一見つながりが不明瞭である。渡辺さんによると、Thursday=Thor's day。Thor(トール)は、北欧神話の雷神だ。雷が木に落ちることからトールは樅の木に棲むとされる。一方、強さの象徴として、インドから中国を通して日本に伝わったのが雷神の存在。俵屋宗達らが絵に描いたことでも有名だ。さらには、本来は「雷神曜日」とでも言うべきThursdayは、日本でも「木」曜日なのである。遠い異国同士の全く発音の違う言葉でも、元をたどると概念が通じる点に、同じ地球上の人間なのだと感じさ



『SOUL ODYSSEY - ユーラシアを探して』より (カット提供=渡辺真也)

せられる。

さらに世界の近さを感じさせたのが、「名前」という言葉をめぐる話だ。「名前」はサンスクリット語で「ナム」というが、その響きは日本語の「名前」にも英語の「NAME」にも似ていると渡辺さんは指摘する。確かに、「NAME」は「ナメ」とローマ字読みすると、「名前」がなまったかのようでさえある。普段何気なく使う日本語の中にも、世界の繋がりが隠れているのだ。

取材・分・撮影(\*1)・レイアウト=板垣万由子



講義中の様子。渡辺さんは白鳥、装飾デザイン調査設計ゼミを担当している鶴岡真弓教授は阿修羅というそれぞれの分野に関係するTシャツを着ていたのが印象的だった(\*1)

**渡辺真也(わたなべ・しんや)** インディペンデント・

キュレーター、ベルリン工科経済大学講師。1980年静岡県沼津市生まれ、専修大学経済学部国際経済学科卒。『SOUL ODYSSEY - ユーラシアを探して』監督。翻訳・通訳も行っている。



# 美術の世界で起きている 生の状況を見せる

小池一子さん (十和田市現代美術館館長、クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授)

1983年に東京・江東区の古いビルを改修して立ち上げた「佐賀町エキジビット・スペース」で数々の実験的な展覧会を開いた小池一子さんが、9月16日に本学八王子キャンパスで特別講義を行った。テーマは、『オルタナティブ!-20世紀後半から逆照射する21世紀のヴィジュアルアート-』。そもそも美術の世界における「オルタナティブ」とは何なのか。今の美大生がこれからの時代を生きるうえでも示唆に富んだ講義の様子をレポートする。



講義中に投影された佐賀町エキジビット・スペースの画像

「今日持って帰ってもらうのは「オルタナティブ」という言葉、そして考え方です」

講義の冒頭で、自身が最も大切にしている言葉を学生たちにしっかりと伝えた。「alternative」を辞書で引くと「《今あるものとは》別の」「型にはまらない」「どれか1つを選ぶべき」といった意味が並んでいる(三省堂「ウィズダム英和辞典」第3版)。まず、言葉自体が多様な価値観を許容する美術と親和性が高そうだ。講義の続きに期待が高まる。

早稲田大学文学部を卒業してほどない時期に、マガジンハウスのアートディレクターだった堀内誠一と出会ったことが、現在までの活動の起点に。堀内は、女性誌『anan』の創刊などで知られる人物だ。「明日から来なさいよ」と言われて秘書になり、多くのフォトグラファーやデザイナーと会い、コピーライティングと編集の仕事 시작했다。そして、デザイナーの三宅一生や田中一光、その後画家になった横尾忠則らと書籍づくりに携わる。

その頃から「日本の文化を発信したい」という意識を持っていた」という。「現代の文化を

作る」といえば言葉は大きいですが、当時は仲間と一緒に無意識にやっていたようだ。たとえばピカソは「元気に服をデザインする子が出てきた。シャネルという名前だっけさ」と言って交流を持ったという。同時代を生きる仲間と同じ価値観を持ち、一緒に創造する。大事なのは、「一緒に勉強している友達にどんな人がいて、どんな人と組みたいか」。今の学生でもすぐに考え、実行するのが可能なことである。

佐賀町エキジビット・スペースを立ち上げたのは1983年だった。舞台となったのは、1927年竣工の「食糧ビル」。「3階に素晴らしい空間があったが、天井が高すぎてほかに借り手がいなかった」。アールデコの趣を持つビルの美しさに惚れ込み、ここで活動を始める。

自分の体を売る、たとえば「あなたの目がほしい」といったことが書かれた契



約書を交わす大宴会をパフォーミングアートにしたシュウゾウ・ガリバー・アツチ、土地に残る時代の痕跡をフロッターージュという技法で紙に刷り込んだ岡部昌生、写真というものが人間の営みの中でどうなっていくかを考えて制作に臨んだ杉本博司など、世の中にさまざまなさびを打ち込んできたたくさんの現代美術家の展覧会を、ここで開いてきた。その底を流れているのは、今美術の世界で起きている生の状況を見せるという考え方。前世紀の終わり頃、世界を震撼させたエイズなどの社会問題をテーマにしたり、その場のみで展示を完結させることを前提にしたインスタレーションを、当時から展示の基本にしたり。美術館などでは実現が難しそうなことにも躊躇なく取り組む。それが「オルタナティブ」の本領だ。テントの中で一人ずつしか鑑賞できない展覧会を開いたのは、今や世界的な作家として知られる内藤礼。アンゼラム・キーファーは、お忍びの来日から展覧会が実現し、大竹伸朗の個展では初めて作風の全容が見えた。伝説的な展示の例だけでも枚挙にいとまがなく、美術展開の重要な拠点になっていたことが分かる。では、「オルタナティブ」は今の美大生にとっても意味がある言葉なのか。

「日本の作家もいい仕事をしている。一方、とりわけ今の日本では管理体制が強く組織がどんどん硬くなっているように感じる。だから「オルタナティブ」が大事なのです」

取材・文・レイアウト = 編集部

**小池一子(こいけ かずこ)** 十和田市現代美術館館長、クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授。1936年東京生まれ。早稲田大学文学部卒。「無印良品」創業以来アドヴァイザリー・ボード。1983～2000年「佐賀町エキジビット・スペース」主宰。2000年、ベネチア・ビエンナーレ第7回国際建築展日本館「少女都市」監修。2012年21\_21 DESING SIGHT「田中一光とデザインの前後左右」。2011年4月、「佐賀町アーカイブ」をスタート。



## アートの街、銀座の表と裏を見る

東京の繁華街として知られる銀座は、レンガ造りの洋館が立ち並んだ明治時代からオシャレなイメージを保ち続けている。アートは、街を支えている大きな要素のひとつだ。銀座の街を歩き、アートの視点での変化を探った。

東京・銀座の街の中心には高層ビルがない。1919年に制定された市街地建築物法(50年制定の建築基準法の前身)により、建築物の高さが最高31メートルに制限されているためだ。98年に適用された新「銀座ルール」により、高さ制限は56メートル(加えて工作物は+10メートル)までに緩和されたが、高層ビルは建てられず、街の解放感は変わらない。建物の立て替えや改築が進んでいても銀座の街が以前と変わらないイメージを保ち続けているのは、こうした規制がうまく機能しているのも大きな理由なのではないだろうか。本学の初代学長だったデザイナーの杉浦非水は昭和の初め頃、銀座四丁目交差点に立つ銀座三越のポスターを制作したが、その頃の銀座のイメージは、ほぼそのまま現在に継承されているようにも思える。

一方、街全体のイメージとは裏腹に、実際に立ち並ぶビルを1棟1棟見ていくと、とても現代的でクリエイティブな造形の建物が増えていることに驚く。だから、建物を見ながら歩いてみるのも、銀座の楽しみ方のひとつかもしれない。ルイ・ヴィトン、シャネル、エルメス、カルティエなどの海外ブランドやステンレスで外壁を覆ったアップルのビルはそれぞれが洗練されたファッションをまとったかのように個性的な装いをあらわにしている。そしてそれぞれのビルのショーウィンドウは、街歩きをさらに楽しくしている。

『銀座のショーウィンドウ-130年の文化史(六耀社)』によると、銀座に初めてショーウィンドウができたのは明治初期。文明開化とともに西洋からいち早く大きなガラス板を輸入し、ある商店の壁にショーウィンドウが設置された。見たことのないガラス張りの装

飾空間に、多くの人が驚いたといわれている。ショーウィンドウは通りを歩く人に強く訴求するメディアだ。その存在は現在にいたるまで、銀座の街に彩りを与え続けている。

昨年4月には銀座松坂屋の跡地に複合商業施設「GINZA SIX」がオープンした。店内では、吹き抜けの大きな空間で草間彌生の作品《南瓜》が宙に浮くなど、アートを強く打ち出したビルのあり方が話題になった。地下3階には能楽堂が入っている。現代アートが見られるビルで能を観ることができるというのも興味深い。伝統と前衛の交差点のようなビルの様相を呈している。

さて、銀座といえば画廊街である。1980年代頃は、画廊が中央通り近辺を中心に500近くもあり、「銀座の地場産業は画廊」と言わしめるほどだったという。だが、90年代に入ってバブル経済が弾けて以降、数は4分の1ほどに激減する。銀座に隣接した京橋地区でギャラリー椿を経営する椿原弘也氏は、アートの街としての銀座の変容ぶりを数十年間見てきた。ここ10年ほどの間にも動きがあったという。

「特に、2008年のリーマンショック以降は画廊の経営が難しくなる中、展示する作品にも変化があった。有名な作家よりも新しい作家の作品を積極的に展示するようになる。買うお客様についても、熱狂的なファンよりも流行を追う人のほうが多くなりました」

新しい作家に目を向けること自体は、よい変化とも映る。だが、一時的な流行に終わるのであれば、長いスパンでの市場評価の定着がないと作家の育成が難しい美術界には好ましい状況とは言いづらい。「それでも、画廊を経営しているのは、いい芸術を一人でも多くの人に知ってもらいたいという思いか

らです」と椿原氏は話す。

銀座界隈には貸画廊も多く点在する。「ある意味で、貸画廊が日本の美術をつくった」と話すのは、現代美術家で本学科教授の海老塚耕一氏だ。銀座にもともとある多くの企画画廊は日本画や洋画など従来の形式・様式の作品を扱うところが多く、戦後登場したアヴァンギャルドな現代美術家たちの作品を扱う画廊はあまりなかった。彼らにとって重要な役割を果たしたのが、東京の銀座、京橋、神田の貸画廊だった。海老塚氏も、1970～80年代には、貸画廊で何度も企画展を開いたそうだ。

一般的に貸画廊とは、作家が自ら画廊を選んで会場費を払い、作品を展示する場所である。ギャラリストという第三者の選別の目を経ずに展覧会を開くことのできる貸画廊には批判的な意見もあるが、美術館や企画画廊が受け入れられないような新しい価値観を問う場となってきたのも事実である。今年は、貸画廊としてよく知られた銀座一丁目のなびす画廊が閉廊するなどのニュースもあり、状況の変化をうかがわせた。それでも、作家たちにとって貸画廊は有用な存在であり、今も多くの作家が個展やグループ展を開いている。海外ブランドのビルなどとは違って見た目は派手ではないものの、新しい美の価値観を問いかけ、世の中をじわじわと動かすという視点で見れば、貸画廊はむしろ美術界の黒子のような役割を果たしている。見た目の変化だけでは分からない魅力を、銀座という街は持ち続けているのである。

アートは銀座という街で重要な役割を果たしている。これからも、街の経済を活性化させ続けるのではないだろうか。

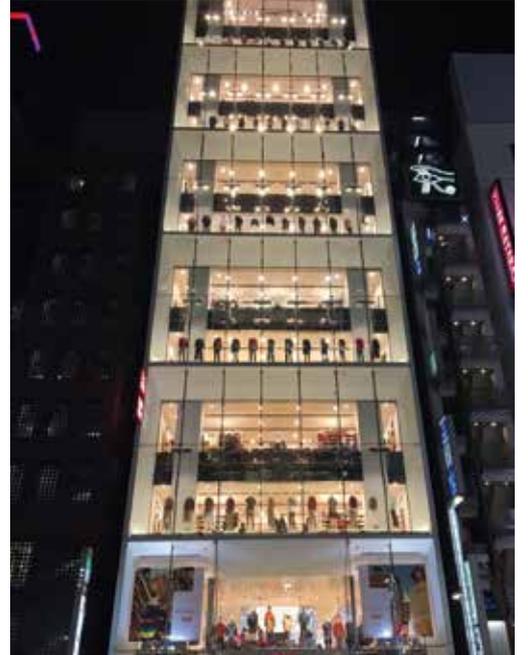
取材・文・撮影・レイアウト＝松澤遼



ショーウィンドウをゆっくり見て回るだけでも、美術館のような楽しみ方ができる



「GINZA SIX」の吹き抜けの宙空に浮かぶ草間彌生の《南瓜》



杉浦非水が制作した銀座三越のポスター（1930年）

ギャラリーは銀座の裏通りに多い

銀座の街にはさまざまなビルが立ち並ぶ



ギャラリー椿で小林健二の作品の前に立つ椿原弘也氏



貸画廊の意義を語る現代美術家の海老塚耕一氏



# スヌーピーミュージアム 誕生秘話



SNOOPY MUSEUM TOKYO 外観



大谷芳照 (YOSHI) によるスヌーピーとチャーリー・ブラウンの3Dアート作品(上)と拡大写真

東京・六本木に、ほのぼのとした犬のキャラクターとして知られるスヌーピーに出会える場所がある。その名も「SNOOPY MUSEUM TOKYO」(スヌーピーミュージアム)。2年半という期間限定で昨年春にオープンした美術館だ。なぜこのスヌーピーをテーマにした施設が日本にできたのか。館長の中山三善さんに聞いた。

チャーリー・ブラウンにもたれかかって気持ちよさそうに昼寝をしているスヌーピー。展示室に入ると壁一面を使ったモザイク画のような絵が目飛び込んでくる。近づいてみると、それは漫画の小さなコマを無数に並べて構成した展示物だった。東京・港区の六本木交差点から歩いて数分のところに立つ「SNOOPY MUSEUM TOKYO」(スヌーピーミュージアム)の会場風景だ。曲面を伴う建物の真っ白な壁の一部に黒い格子状の窓と

いう外観はとてもシンプルで、どことなくスヌーピーそのものを思わせる。同館がオープンしたのは昨年4月。毎日多くの来館者でにぎわっている。

そもそもなぜ日本に、アメリカのキャラクターをテーマにしたミュージアムができたのか。館長の中山三善さんに聞いた。

アメリカ・カリフォルニア州にサンタローザという小さな町がある。スヌーピーが活躍する米国の漫画『ピーナッツ』の生みの親であるチャールズ M. シュルツ (1922～2000年) が生涯のうち数十年を過ごした地だ。そこには、シュルツ自身の名を冠した「シュルツ美術館」がある。実はスヌーピーミュージアムは、この美術館の分館として、期間限定で開館したのだそう。ではなぜ分館の設立が日本だったのか。発端は2013年にさかのぼる。同年10月から翌年1月まで、東京・六本木ヒルズの森アーツセンターギャラリーで「スヌーピー展」が開催された。来場者数は28万人を記録し、大成功と言える結果とな



アメリカ・サンタローザのシュルツ美術館

る。作品を貸し出したシュルツ美術館は、改めて日本でのスヌーピーの人気ぶりを認識した。

そもそも日本は、漫画『ピーナッツ』の読者がアメリカに次いで世界で2番目に多い国だという。さすが、漫画大国と言われるだけのことはある。ならば、美術館を建てれば、さらに多くの日本のスヌーピーファンのニーズに応えられるのではないか。こうして設立の模索が始まるのである。

検討を重ねる中、六本木ヒルズにほど近い場所に第2の六本木ヒルズを建設する再開発計画が進んでいるという情報が入ってくる。そこで浮上したが、保育園が移転した後の空地に、期間限定のミュージアムをつくるという案だった。再開発の工事が始まるまでの2年半足らずの開館期間とはいえ、建物そのものに手をかけることや、



ウッドストック

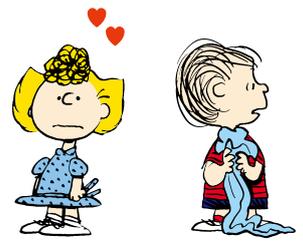
スヌーピーミュージアム館長の中山三善さん。旧東京ステーションギャラリーの立ち上げや森アーツセンターギャラリーの運営を担当するなど、各地の美術館の建設や展覧会のプロデュースを行う。お気に入りのキャラクターは、タイピングが得意なウッドストックだそうです。



スヌーピー



「ピーナッツ」原画（部分）1977年8月9日



サリー ライナス

一度の展覧会では見せられない多彩な内容を伝えることができ、リピーターも見込める。六本木という立地も申し分ない。こうして、アメリカの小さな町の美術館の分館が東京という大都市にできることになったのである。

開館後は、半年ごとに展覧会を入れ替えることで展示内容の刷新を図っている。企画はクリエイティブ・ディレクターの草刈大介さんを中心に、デザイナーや建築家が一緒に

なって制作しているという。

本誌が発行される頃に開催されている展覧会には「Love is Wonderful-恋ってすばらしい。」というタイトルがついている。展示のフライヤーを見ると、「チャーリー・ブラウンは『赤毛の女の子』の前でため息をもらし、ガミガミ屋のルーシーはシュローダーを一途に想いつづけます」という一文が。かわいいキャラクターたちの恋のはざまでスヌービー

がはたしてどんな存在感を見せる展示になっているのか、大いに楽しみである。

なお、企画の内容は、第1回目から見ていくと次の展覧会につながるような工夫がされているという。連続して展覧会に行けば、ストーリー性を楽しめるということだ。

取材・文・撮影(\*)・レイアウト  
=新西洗之介



ショップ（上写真）で売っている新商品。ファイヤーキング（左写真、各4500円）とニットポーチ（各2600円）



チャーリー・ブラウン



「ピーナッツ」原画（部分）1953年5月30日



オラフ

**SNOOPY MUSEUM TOKYO**  
(スヌーピーミュージアム)  
東京都港区六本木5-6-20  
<http://www.snoopymuseum.tokyo/>

**【展覧会情報】**  
特別展「Love is Wonderful  
-恋ってすばらしい。」  
会期：2017年10月7日～2018年4月8日



チャールズ M.シュルツ (1922～2000)  
© Schulz Family Intellectual property Trust



スヌーピーミュージアム、クリエイティブ・ディレクターの草刈大介さん

## ♡ 展覧会に合わせたカフェのシェアメニュー ♡

併設されているカフェ「Cafe Blanket」にはオープンデッキがあり、とても居心地がいい。メニューは展覧会に合わせて変えるものもある。「恋ってすばらしい。」展に合わせて作られる新メニュー2品「ルーシーとシュローダーのオープンサンド」(※2017/10/7～2018/1/14の期間限定メニュー)と「シェアフロート」を取材時に試食した。見た目は多彩で可愛らしく、味は子供から大人まで好まれるようなものになっている。いずれも恋をテーマに2人で1つのものを食べるボリューム満点の内容。恋人と2人で来てシェアするのもいいが、友達や家族などと食べても満足できるだろう。



カフェの新メニュー。左から、ルーシーとシュローダーのオープンサンド(1630円)、シェアフロート-my sweet babboo-(1100円)



©Peanuts Worldwide LLC



# アルチンボルドの寄せ絵に 皇帝の力を見る



ジュゼッペ・アルチンボルド《春》(1563年、マドリッド、王立サン・フェルナンド美術アカデミー美術館蔵)



ジュゼッペ・アルチンボルド《夏》(1572年、デンヴァー美術館蔵)

## 「アルチンボルド展」(終了しました)

会期：2017年6月20日～9月24日  
会場：国立西洋美術館  
〒110-0007  
東京都台東区上野公園7-7

東京・上野の国立西洋美術館で「アルチンボルド展」が開催されている。花や動物などを組み合わせてパズルのように人物像を描く「寄せ絵」の画家として知られるジュゼッペ・アルチンボルドの絵画をよく観察すると、ハプスブルク家が支配した16世紀欧州の一端が見えてくる。

ジュゼッペ・アルチンボルド(1526～93年)は、神聖ローマ帝国ハプスブルク家の宮廷画家として、16世紀後半に活躍した人物だ。特徴的なのは、美しい花々、魚や貝、鳥、哺乳類などの動植物、あるいは飲料用の器や書籍といったいわゆる「物」を集めて組み合わせることで一人の人物の顔を作り出す「寄せ絵」と呼ばれる作品群である。まるでパズルでも作るかのようには肖像画を描いているのだ。国立西洋美術館で開催中の「アルチンボルド展」には、実に約10点もの油彩作品が展示されていた。全世界

※この記事はWebmagazine「タマガ」に掲載された記事(2017年9月7日付)を一部加筆して再録したものです。

に残っている油彩画は数十点しかないというし、そもそも日本では実物を見る機会がまれな作家だった。極めて貴重な展覧会とっていいのではないだろうか。

作品をつぶさに観察した後、同展のカタログを読んでいて、とりわけ驚いたことがあった。アルチンボルドが寄せ絵を制作するために人物のパーツとして描いた花や魚、鳥、果物などの中には現代人には見覚えがあるものの、16世紀の人々にとっては珍しいと思われるものが含まれていたのだ。例えば連作「四季」のひ

とつ《夏》はさまざまな果物や野菜で人物の横顔を形作った作品だが、描かれた野菜の中にトウモロコシが含まれていた。同展カタログによると、トウモロコシは1525年以前にはヨーロッパでは栽培されておらず、その頃発見されたアメリカ大陸から輸入されていたという。今でこそ普通に食卓にのぼるトウモロコシだが、当時の人々から見れば、とても珍しいものだったに違いないのだ。

ユリ、シャクヤク、オダマキ…「四季」の連作の中の《春》は、たくさんの花々の組み合わせ



会場入口の向かい側に設置されていたアルチンボルドメーカー。前に立つとカメラで撮られた自分の顔がアルチンボルド風になって画面に現れる

ジュゼッペ・アルチンボルド《水》(1566年、ウィーン美術史美術館蔵)

ジュゼッペ・アルチンボルド(?)《火》(スイス、個人蔵)

で人の横顔を形作っている。実に幸福感に満ちており、文字通りの「華やかさ」をたたえた作品だ。花の一つ一つを観察すると、それぞれが極めて丁寧に描かれており、まるで植物図鑑のようでもある。国立西洋美術館主任研究員の渡辺晋輔さんによると、植物学者に調査を依頼することで花の種類が特定できたという。描かれた花はおよそ80種類。アルチンボルドは花の美しさだけでなく、たくさんの種類を描くことにも意義を見出していたのではないだろうか

「四大元素」という、科学史をほうふつさせる名の連作も出品されていた。そのうちの一枚、《火》は、オイルランプなどの道具で人物の姿を構成している作品。興味深かったのは、大砲や銃といった戦争の道具が描かれていたことだ。確かにこうした道具は「火器」と呼ばれることがある。当時から同じような認識だったことが分かる。連作「四大元素」のひとつ、《水》には、エイやエビ、タコやウミガメなどの水棲生物が多数描かれていた。中には、タツノオトシゴやゴカイなど、当時の人々がどうやって見たのだろうと想像をたくましくしたくなるような生物が描かれていた。しかし、アルチンボルドはなぜこんなに「奇妙な絵」をたくさん描いたのだろうか。渡辺さんは、とても丁寧に答えてくれた。

「『四季』と『四大元素』は当時の皇帝だったマクシミリアン2世に捧げられ、皇帝を称揚す

るために描かれました。それにしても《春》になぜこのような膨大な種類の花を描くことができたのか。ハプスブルク家には植物園があったのです。そこでは世界各地の花々が集められていました。植物園に入るのは、皇帝や皇帝の許可を得た貴族のみの特権でした。《火》では、立派な帝国であることを誇示するために武器を描いた。《水》についても理由があります。宮廷があったウィーンは海のない町。海の生き物を集めること自体が大変であり、驚きをもたらすものでした。宮廷に世界中のものを集めることが、帝国や皇帝の力を示したのです」

現代ほど輸送の技術が発達していなかった16世紀は、世界各地の動植物を集めて分類することは、よほど大変だったはずだ。権力を持った人間ゆえ成し遂げることができたのだろう。アルチンボルドの作品は、皇帝の威光が表れたものだったのだ。

では、なぜアルチンボルドは「寄せ絵」という手段で表現したのだろうか。アルチンボルドを宮廷に招き入れたマクシミリアン2世は、「クンスト・ウント・ヴンダーカンマー」(ドイツ語で「芸術と驚異の部屋」を意味する)という部屋を作っていたという。珍しい生き物や植物の標本、奇妙な人工物などを系統立てて分類し、収めた部屋だった。今の博物館の原型でもある。小宮正安著『愉悦の蒐集 ヴンダーカンマーの謎』によれば、ヴンダーカンマーの

一つの要素として、ただ珍しいものを集めるだけでなく、自然のもの、化学のもの、珍奇なもの、人工のものなどのジャンルに分類し、さらには見せ方を考えて当時は高価だったというガラス扉のキャビネットに収納するなどしていたという。珍しいものを収集し、見せるということ自体が、まさにアルチンボルドの作品に共通するのではないか。アルチンボルドの作品は、それぞれが一枚の絵画に築かれた「ヴンダーカンマー」といえるかもしれない。渡辺さんによると「アルチンボルドの作品は皇帝の寝室に飾られていたという証言もある」という。「驚異の肖像画」と呼んでもいいかもしれない。

取材・文・撮影(\*)・レイアウト＝椋田大揮



同展を担当した国立西洋美術館主任研究員の渡辺晋輔さん(\*)



## 小国和紙・新潟の雪が生み出す伝統

日本の伝統産業のひとつ、和紙づくり。新潟県長岡市で作られている小国和紙は、豪雪地帯ならではの雪を活かした製法が特徴的だ。「ふるさと」の伝統はどんな場所で培われているのか。現地を訪ねた。



漉いた紙を重ねているところ。この後、水分を絞ってから乾燥させることで和紙ができる

残暑の厳しい8月下旬、長岡市小国町へと足を運んだ。小国和紙生産組合の工房は、山と田園に囲まれた場所にあった。

同組合専務取締役の今井千尋さんに、温かみのある木造の工房へと案内してもらった。そこには、原料となる楮(こうぞ)や、それを加工したもの、加工するための機材があった。実際の生産現場の風景が見え始めてワクワクしてくる。工房の中では、二人のスタッフが和紙を漉いていた。紙漉きには厚みの調節が欠かせない。この繊細な技術を修得するにはどれほどかかるのだろうか。今井さんに聞くと、「半年ほどかかります」と教えてくれた。

基本的な和紙の製法は国内各地の工房でおおむね共通しているというが、小国和紙には独自の特徴がある。雪を使う点だ。白い和紙を作るには楮の皮を紫外線に当てて色素を壊すのだが、楮を雪の上に置くことで水分を与え続けられて色素が抜けやすくなり、雪の冷たさは雑菌を寄せつけず、腐食を防ぐ。この楮の皮の漂白工程を「雪晒し」(ゆきさらし)という。また、豪雪地帯であるために屋外で漉いた紙を干すことができず、かといって燃料を使っ

て乾かすのは不経済だ。そこで、紙を雪の中に埋めて保存する。これを「かんぐれ」という。余計な資源を使わずに製造をまっとうしているのだ。豪雪を生かした天然の冷蔵庫を使うという機転の利いた発想には驚かされる。そして、春になると板に紙を並べて雪上で天日干しをする。雪上での天日干しの目的は乾燥だけではない。楮の雪晒しと同じように、日光と照り返しの紫外線に当てることで紙を白くするので。

今井さんは「和紙業界に原料不足という課題がある。楮の作り手が少なく60歳で若手と言われるほどです。自家生産もしているが畑の維持が大変。また、力仕事があるのに紙漉きのような繊細な作業もしなくてはならず、体調に注意しています」と言う。一方で、「多くの見学者や海外のお客様に来てもらったり、子どもたちに教えたりなど注目していただけるのはありがたいことです。最近は小国和紙を素材にしてモノを作りたいという人も増えてきて、クリエイターとコラボしてモノを作るのが面白いです」と、やりがいを語った。

工房の次に、少し離れた場所にある「おぐに

和紙の店」を見せてもらった。ここでは、通常の和紙はもちろん、和紙でできたはぎやアクセサリー、インテリアなどさまざまな姿の和紙製品が並んでいる。注目の商品は「オリンモ」という「折りもん(折ったもの)」をもじった名前のカードケースで、日本の伝統文化の折り紙の要領で作られている。紙製のイメージに反して革のような質感と高い耐久性を持っており、1年以上使えるという優れものだ。丈夫さの秘訣は和紙を何層かに重ね、そこに柿渋を塗ることだという。やはり素材を製品に生かすのはアイデアなのだ。

「最近では小国といえば小国和紙といわれている。ここでやめるわけにはいきません」

今井さんが小国和紙に抱いている思いだ。地域の小学生は自分で漉いた和紙の卒業証書を携えて卒業しているという。小国和紙は地域の、そして世代間の暖かいつながりを感じさせる産業だとわかった。和紙や伝統産業の品を見かけたら、作り手や周囲の環境に思いを馳せたいものである。

取材・文・撮影・レイアウト = 板垣万由子



和紙の原料となる楮

「先染め」という技術によって色が付けられた和紙。繊維の状態では色付けしてできる。同じ色は二度と作れないという、まさに一期一会の和紙だ

## 和紙作りの流れ

楮の収穫

楮を切り揃える

蒸して熱いうちに皮をむく

皮引き：皮の表皮、芽の跡、傷を包丁で削ぎ取る

雪晒し：むいた皮を雪の上で天日干しして白くする

皮を煮る

チリヨリ：水の中で傷、チリ、スジなどを除去

煮た皮を叩いて繊維状にする

紙漉き：水を張った紙漉槽に原料を入れ、沈殿防止にトロロアオイを入れてかき回してから紙を漉く

かんぐれ：漉いた紙を雪の中に埋めて春まで保存する

水分を絞る

紙干し：温めた鉄板に貼り付けて紙を乾燥させる

3月頃に天日干しをする

**完成!**

※季節、紙の種類により、工程は異なる

小国和紙生産組合  
〒 949-5341  
新潟県長岡市小国町小栗山 145

おぐに和紙の店  
〒 949-5333  
新潟県長岡市小国町小国沢 2505

Special Interview

# 「多摩ニュータウン」が 音楽のオリジンになった

DÉ DÉ MOUSE 遠藤大介さん（作曲家、DJ、キーボディスト）



《DÉ DÉ MOUSE の盆踊りをするイベント》

DÉ DÉ MOUSE の遠藤大介さんが生み出すテクノポップはリズムカルだが、どこかに懐かしさを感じる。自身がしばしばDJを務めるという「サイレントディスコ」に出かけ、ヘッドフォンをはめて踊り始めると、その世界にどっぷり身を浸すことができる。ところが遠藤氏にその音楽のオリジンを聞くと、意外な答えが返ってきた。



**遠藤大介 (えんどう・だいすけ)** 作曲家、DJ、キーボディスト。1978年10月17日生まれ。群馬県出身。2007年にアルバム「tide of stars」でavexよりデビュー。2010年にレーベル「not」を立ち上げる。2012年に多摩ニュータウンテーマ「sky was dark」をリリース。TOKYO DESIGNERS WEEK やフジロックフェスティバルなどの国内のフェスに次々と参加。海外では毎年アメリカで行なわれている「SXSW」という大規模なイベントにも出演を果たす。「DÉ DÉ MOUSE」は遠藤氏が立ち上げたソロ・プロジェクト。

「サイレントディスコ」は、大衆が踊る現代的なディスコの形態である。ただし、室内・屋外にかかわらず、ワイヤレス・ヘッドフォンをつけて踊る。通りがかりの人には音が聞こえないので、不思議な光景として映るかもしれない。実際に経験してみると、街の中で音楽を聴いているというよりも、自分の部屋の中で音楽に浸っている状態に近い。ヘッドフォンをふと外してみると、大勢の人々がただ無音の中で踊っているのを客観的に見ることになる。再び装着すれば、すぐに音と踊りの世界に舞い戻ることができる。防音設備等がいないサイレントディスコは、クラブミュージックをクラブなどに行かなくても気楽に楽しめる場をさまざまな場所に創出している。

DÉ DÉ MOUSEの遠藤大介さんは、自身の曲を流すサイレントディスコをしばしば開き、DJを務めている。サンプリングボイスとシンセサイザーを駆使して展開するDÉ DÉ MOUSEの音楽は、いわゆるノリノリのダンスミュージックとは一線を画した独自の世

界を創り出す。ヘッドフォンをつけてその音楽に身を浸すと、リズムに乗って体の中の一つ一つの音が広がりを得るような感覚を体験できる。ベースはリズムカルなのに、心の中の叙情性が掘り起こされるような音楽というべきだろうか。

その独特の世界観のオリジンは、遠藤さんが専門学校に通っていたころ、「多摩ニュータウン」(東京都多摩市)という場所と出会ったことにあるそうだ。遠藤さんにとって景色は音楽を作る過程で非常に重要なものであるという。幼い頃から、「すでに過ぎ去ってしまった過去の日の出来事」に興味があり、昔の写真を見て「楽しかった、でももう戻れない」という、ノスタルジックな気持ちになるのが好きな子どもだった。その小さな一つ一つの記憶を思い出し、掘り下げ、「音」と結びつける。それが遠藤さんの奏でる音の源だということである。幼い頃に読んだ童心社『おしいれのぼうけん』(ふるたたるひ／たばせいいち作)という絵本にも影響を受けた。描かれていたのは、古い街のある保育園でのファンタジッ

クなできごとだ。ノスタルジックな描写が心になじみ、ここにも音の原風景を見つけていたのである。

高校を卒業後、専門学校で音楽を学ぶため出身地の群馬から上京したばかりの東京は、子供の頃に思い描いていたきれいな街のイメージとはかけ離れていたようだ。現実には、公害などに汚された街だったのだ。しかし、学校に通っていた京王線沿線で、アルバイトの帰りに毎日のように寄り道した街があった。聖蹟桜ヶ丘。知る人ぞ知るジブリアニメの『耳をすませば』のモデルとなった街だ。さらに神奈川県橋本方面に足を伸ばした時、途中にあった「多摩ニュータウン」に辿り着く。駅から人々が暮らす街なかに向かい、しばらく歩いていると、落ち着いた風景が目にしなると入ってきたという。『おしいれのぼうけん』の絵ともイメージが重なり、そこから景色に触発された音楽が生まれる。

2005年以降、「DÉ DÉ MOUSE」というプロジェクト名で活動の幅を広げる以前、スランブに陥る。24歳のころだった。それまでは自信満々に作品を作り、大手レコード会社からのデビューの話がいくつもあり、世間の人々には順風満帆のように見えていたかもしれない。しかし本人は、そういった誘いや人間関係から距離を置き、完璧なものを作ることを目指す中でもがき苦しんでいた。自分の満足する作品がまったく作れず、相談した友人からは「音楽から一度離れた方がいい」とまで言われたそうだ。

それでも理想を追い求めた音楽を作り続け、2年後の2007年、アルバム『tide of stars』でデビューを果たす。エスニックな香りの漂うテクノポップとでも言うべきだろうか。スランブから脱却し、一つの世界を見つけ出したことが分かるアルバムだ。遠藤さんは、「やりたいことを成し遂げる人は、やめたくてもそれをやめられない人だとも思う。辛くてもやり続けられるかが大切」と振り返る。

サイレントディスコでDÉ DÉ MOUSEの音楽を聴きながら目をつぶって踊っていると、まぶたの裏にまるでアニメーションを見ているかのような美しい光景が広がることもある。遠藤さんの話を聴いて、その理由がよく分かった。



左：DJをしている遠藤さん

右：サイレントディスコで多くの人々が音楽を鑑賞している様子

取材・文・レイアウト＝山田浩子  
写真提供＝DÉ DÉ MOUSE

zoom up

# “QUOTATION”

## 世界のクリエイターの インタビュー記事で誌面を構成

デザイナーやアーティストのインタビュー記事で世界のクリエイティブシーンを伝える雑誌“QUOTATION”。どんな思いを込めて雑誌づくりをしているのか。編集長の蜂賀亨さんは、「たくさんの愛情が込められているんです」と語る。

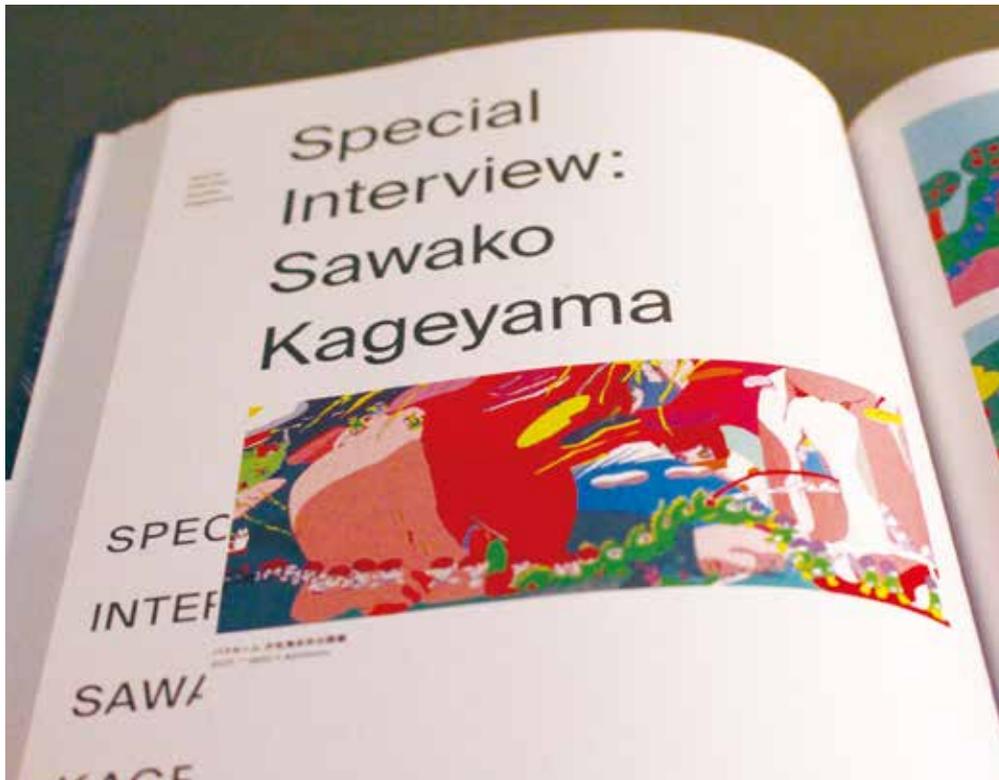
優秀なカメラ機能を備えたスマートフォン、レイアウトや描画が可能なパソコン用のアプリケーションソフトなどが普及し、デザインやアートの作品制作がプロ以外でも容易になってきた。そうした状況の中で、クリエイターたちは何に意義を感じ、どんな手法でクリエイションをしているのか。そんな問いに答えてくれる雑誌がある。クリエイティブディレクターの蜂賀亨が編集長を務める“QUOTATION”である。

この記事を書いたのは、家にアマゾン便で“QUOTATION”の最新号がちょうど届いた日だった。ページをめくると、様々なプロジェクトを手がけるWHITEvoidというチームの代表である、Christopher M.Bauderのインタビュー記事が載っている。ベルリン出身の彼は、数十万の光の風船とレーザー光線でベルリンの壁をあざやかに描き出す作品などを手がける、インタラクティブアートの先駆者的存在だ。最新号ではデジタルアートを特集している

が、“QUOTATION”で取り上げられる作品は今年2月に発行された第25号の特集「ファッション業界で活躍しているクリエイター」のように、ファッションに関するものであることが多い。なぜ、今号の特集はファッションではなく、デジタルアートなのだろうか。「ファッションは自由で、力強く、“いま」という時代性を強く反映する。だから、ファッションに関する記事が多かった。しかし、創刊時から変わらないテーマは『いまだからこそ面白い』クリ



2017年9月27日発売“QUOTATION”最新号の特集は「パブリックデジタルアート」。表紙にも使用されている Refik Anadol の作品は目風の流を最先端の AI によって視覚化する「データスカルプチャー」を使用する。第15回「1\_WALL」グランプリを受賞し、今年多摩美術大学を卒業したイラストレーション・アニメーション作家の影山紗和子を12ページにわたり紹介している。



“QUOTATION” 最新号に掲載された影山紗和子のページ

エイティブであり、クリエイティヴに『自由さ』を与える作品。そこで選び取ったのが、最新号のデジタルアートなのです」というのが蜂賀の答えだ。

“QUOTATION”は、「引用符」を意味する英語だ。では、この雑誌ではいったい何を「引用」しているのか。国内外のデザイナーやアーティストたちのインタビュー取材を中心に誌面を構成し、彼らの言葉を時代の証言として「引用」する。誌名を意識しながらページをめくっていると、タールで洗練された誌面デザインの奥から、そんな気概が伝わってきた。現在のところ発行は年2回。海外取材を敢行した記事も多く、世界のクリエイティブシーンに敏感な読者には、頼もしい媒体になっている。

興味深いのは、海外のクリエイターを取材した記事に英語の対訳がついていることだ。通常、日本の雑誌の取材記事は、掲載誌を送ってもらっても外国人の取材先には内容がほとんど分からない。しかし、「自身が取材された記事を理解できる」のは、ただ内容を確認するだけでなく、自分がどう評価されているかを知うえで、本来はとても重要なことである。執筆するライターや編集者も、本人が理解できる記事になるなら、より引き締まった気持ちで仕事に臨むだろう。そして何より、海外の人々にも雑誌の存在や意義をアピールできる。これまでの日本の多くのメディアの弱点をすでに克服できているところに、大きな展開の可能性がある。

蜂賀は「クリエイターの言葉と作品を、可能な限り公平性を保って載せている」という。一方で、実は“QUOTATION”で取り上げられる

クリエイターには、著名な人物やグループがあまりいない。それに対し蜂賀は「雑誌の売上げを単純にあげることを考えれば、有名な人やブランドを特集すれば、内容は悩まなくて済みます。読者はその内容を話題性のあるものとして、共有することもできる。しかし、ほかの雑誌やメディアで紹介し尽くされているクリエイターよりも、大々的には知られていなくて、有名ではないけども真面目に面白いことをやっている人のためにページを割きたいですね」と語った。つまり、“QUOTATION”とは読者と情熱のあるクリエイター、両者のための雑誌なのである。さらに、クリエイターと読者の間に別の意図を介在させたくないという方針から、すべてクリエイター自身から提供を受けているという作品写真やイラストに満ちた美しい誌面は、めくっているだけで目に楽しい。そして、ときには淡々と、ときには力強く連なる言葉が、クリエイターの力を裏づけるのである。

インターネット全盛の世の中で、制作から販売まで大きな手間がかかる雑誌の発行を続けるのは、実際極めて困難だ。蜂賀は「ウェブ媒体にはさまざまな情報が盛り込めるし、伝わるスピードも速い。しかし、雑誌は何よりもたくさんの方が関わりながら作り上げている。だからたくさん愛情が込められているんです」と話す。特に、“QUOTATION”は国内外にいる複数のコントリビューターが蜂賀に対し、「面白いことをしている」クリエイターの紹介を提案することで、特集が組まれる。さらに、取材されるクリエイター、取材するライター、編集者、校閲者、誌面デザイナー、販売担当者、書店員な

ど多くの人の手を経て読者に渡るのが雑誌という媒体だ。改めて“QUOTATION”誌を手にとってみる。間違いなく「物」である。手で愛でたくなるような感情がそこはかたく湧き出てきたことに気づいた。

取材・文・レイアウト＝野田美紗子  
撮影＝小川哲汰朗



#### 蜂賀亨（はちが・とおる）

編集者／クリエイティブディレクター。ピエブックスを経てクリエイターマガジン「+81」を1997年に企画／創刊、11号まで編集長を務める。その後「GASプロジェクト」開始にあわせて、クリエイティブディレクター、エディトリアルディレクターとして、書籍シリーズ、DVD、GAS SHOPのディレクション、展示会の企画等を担当。2008年11月世界のクリエイティブジャーナル誌“QUOTATION”(BNN新社刊 - no.12 / Matoi Publishing No.13-)を創刊、編集長を担当するなどクリエイティブをテーマに様々な分野で企画／プロデュース、執筆、デザイン、ディレクションなどで活躍中。著書に『from Magazine』(BNN新社)『creative in japan』(BNN新社)などがある。

## Whoops! 考

## 「筋目描き」に伊藤若冲の神髄を見る

江戸時代中期の絵師、伊藤若冲は、水墨画で魚のうろこや鳥の羽を描くのに「筋目描き」という、当時の新技法を使ったという。画家の表現意欲を物語る話だが、作品を見ていて疑問が湧いた。若冲は筋目描きをするのにどんな墨を使ったのか。取材を進めると、予想もしていなかった事実が明らかになった。



伊藤若冲（鯉絵図）  
（個人蔵）  
魚のうろこに筋目描きが使われている

「筋目描き」は、江戸時代中期の京都の絵師、伊藤若冲が用いた技法だ。魚や鳥をモチーフにするときに、水をたっぷり入れて薄めた墨汁を宣紙という紙に一筆ずつ置いていくことで、うろこや羽の絶妙な重なりが鮮やかに表現できるのだ。若冲は極彩色で鶏などを描いた《動植綵絵》などの作品が特に有名である。しかし、実は水墨画にも見るべき作品が多く、「筋目描き」はモノクロームの世界で表現の幅を広げる重要な役割を果たしている。一昨年4月、東京都美術館で開催された「生誕300年記念 若冲展」に出品された作品でも使われていたとのことで、図録を見ながら記憶を手繰るうちに、ふと疑問が頭をまたげてきた。若冲はいったい、筋目描きにどのような墨

を使っていたのか。ひょっとしたらなにか特殊な墨を使っていたのではないのか。謎を解くために、東京文化財研究所にある保存科学研究センターを訪ねた。取材に応じてくれたのは、日本学術振興会特別研究員の宇高健太郎さん。水墨画や書などで使われてきた墨を研究する稀有な学者だ。宇高さんは、自身が執筆した論文「古典絵画における墨の研究 付論：伊藤若冲紙本墨画作品の復元模写による検証」の中で、筋目描きについても言及している。また筋目描きのメカニズムについては、同氏らによる芸術新潮2016年5月号の記事に次のような解説がある。

「手前に重なって見えている鱗のほうが、先に置いた仕事です。まず最初の筆跡（濃色部分）の周りに、水とともに紙の繊維の隙間を通り抜けた粒子だけがさらに広がり、淡色の滲みを作っていきます。その上から次の筆を重ねても、そこには既に十分な水分が含まれているから、後から置かれた墨液はもうそれ以上吸収されない。そのため、まだ乾いたままの部分にだけ新しい筆跡を残して、そこからまた淡色の滲みが拡がってゆく。この繰り返しです」

しかし、技法の仕組みがわかっても、墨がどのように関わってくるかについては見当がつかない。宇高さんに、開口一番「筋目描きにはどんな墨が適しているのか」を聞いてみた。

「若冲の筋目描きは、一般的な和墨では綺麗にできない」

宇高さんの言葉には、期待に違わぬ驚きを得た。和墨で筋目描きを試みると、墨の塗りが均一にならず、輪郭が荒れ、先においた筆致が後においた筆致と重複して見えてしまう。ところが、唐墨、すなわち中国産の墨を使うと輪郭がくっきり見え、筆致の重複も起きにくいという。宇高さんは、自身が集めたさまざまな墨の筆跡が一枚一枚唐紙に描かれたサンプルを見せながら、質問に丁寧に答えてくれた。

「墨は顔料としてのすすを、展色剤としての膠と練り合わせて固めたものです。すすそのものは疎水性ですが水とは直接馴染みません。ですが、膠は界面活性剤としてすすの粒子を包み、水中分散を可能にします。この状態が墨液です。この現象は系中に一定以上の界面活性剤濃度がないと保てません。これを臨界ミセル濃度と言います。それを下回るとすすはうまく分散しないのです。膠の濃度が高い分にはいいのですが、低いと分散が不安定になり、輪郭がボソボソと荒れてきます。一般に和墨

は膠の濃度が低く、唐墨は高い。だから、筋目描きには唐墨がより適しているのです」

動物の皮などから作られる膠はゼラチンを主成分とした界面活性剤/接着剤で、墨はいわばすすをゼラチンで固めたものである。また一般に、和墨におけるすすと膠の割合は10:5～10:6、唐墨では10:10～10:12だったという。

では、伊藤若冲が筋目描きに使った墨は唐墨だったのか。宇高さんからは、意外な答えが返ってきた。

「若冲が使った墨は唐方式の和墨だったと考えられます」

若冲の生きた江戸時代中期に、唐墨と近い組成や性能の和墨が日本で作られていたというのである。そしてそれは特に唐紙に合わせて開発された旨の記録があるという。若冲の《鯉絵図》と《若に牡丹図》の墨をサンプルとして採取し、電子顕微鏡で分析すると、すすの一次粒子が $0.08\mu\text{m}$ と、松煙煤としては比較的小さいことがわかった。一方、同時期の松煙系唐墨のすす一次粒子については十分の数 $\mu\text{m}$ 程度の値が報告されている。粒子で見ると日本産の松煙煤であることが類推できるというわけだ。若冲の使った墨はおそらくもう残っていないため特定は難しいが、日本の松煙煤は一般に障子焚きと呼ばれる火力の小さい製法で造られていたことから、大きな火力ですすを作る中国の方法に比べて粒子が小さくなる傾向にある。一方、若冲作品の墨の分散具合や画面効果は唐墨のそれに酷似したものであった。また、若冲の筆跡を見ると輪郭がくっきりしており、すすの分散も比較的均一であったことが窺われた。唐方式の和墨と考えられるゆえんである。宇高さんはこの材料の特定のために、当時の墨を各種使って筋目描きの再現や分析をしたほか、墨やその原料のすす、膠そのものを再現することも試みたそうだ。

宇高さんへの取材で、若冲が表現のために新しい技法に取り組み進取の気性を持った絵師だったことが、とてもよく分かった。こうした細部にも画家の神髄は表れている。また若冲への興味が増した。

取材・文・写真(\*)・レイアウト＝椋田大揮



和墨、唐墨による筋目書きの再現。和墨だと輪郭がボソボソと荒れて先においた筆致が透けてしまうが、唐墨だと輪郭がくっきり表れ、先においた筆致もほとんど透けない(\*)

額縁・画材・デザイン用品

実施中のお知らせ!!

# 多摩美術大学生支援セール

学校まで **直接配達** だから **便利!!**

詳しくは校内設置、又は配布しておりますチラシをご覧ください。

- 張りキャンバスが安い!
- 木枠、木製パネルが安い!
- カットキャンバス、ロールキャンバスが安い!
- 油絵具、画溶液が安い!

\*\*\*\*\* 安い価格のほんの一例 \*\*\*\*\*

世界堂製張りキャンバス (カルワク) F100	.....大特価 ¥11,300 (税込)
世界堂製木枠 (杉材) F100	.....大特価 ¥9,900 (税込)
木製パネル F100	.....大特価 ¥13,900 (税込)
カットキャンバス 麻 100% (中目) F80	.....大特価 ¥4,000 (税込)
カットキャンバス 麻 100% (中目) F100	.....大特価 ¥4,800 (税込)
世界堂製画溶液ペインティングオイル 1,000 ml	.....40%OFF ¥2,650 (税込)
世界堂製画溶液テレピン 1,800 ml	.....40%OFF ¥4,650 (税込)
世界堂製ブラシクリーナー 2,000 ml	.....40%OFF ¥1,400 (税込)
世界堂ロールキャンバス C&T 中目 1.4x10m	.....大特価 ¥12,700 (税込)
ホルペインアクリラジェツソ 900 ml 詰め替え	.....大特価 ¥1,600 (税込)

2017年5月末時点の特別セール価格です



ご注文、問合せは (株)世界堂 多摩美術大学生支援セール係

E-mail [gaisho@sekaido.co.jp](mailto:gaisho@sekaido.co.jp) FAX.03-5360-4010 TEL.090-3716-4575

豊富な品揃えと満足プライス日本最大級専門店チェーン

新宿本店 TEL.03-5379-1111 〒160-0022 東京都新宿区新宿 3-1-1 (営業時間 9:30~21:00 まで)

池袋パルコ店 (池袋パルコ 6F)	☎03-3989-1515	相模大野店 (相模大野モアーズ4F)	☎042-740-2222
立川北口店 (クリサス立川5F)	☎042-519-3366	ルミネ横浜店 (ルミネ横浜 8F)	☎045-444-2266
アートマン店 (京王アートマンA館3F)	☎042-337-2583	ルミネ藤沢店 (ルミネ藤沢 4F)	☎0466-29-9811
町田店 (町田市原町田4-2-1)	☎042-710-5252	新所沢パルコ店 (新所沢パルコLet's館3F)	☎04-2903-6161
		名古屋パルコ店 (名古屋パルコ東館5F)	☎052-251-0404



インターネットでお買い物 <http://webshop.sekaido.co.jp/>  
SEKAIDO ON-LINE SHOP 世界堂オンラインショップ 検索

情報満載!世界堂のホームページ <http://www.sekaido.co.jp/>



art exhibition TAMAVIVANT II 2017

## ポガティブ



パルテノン多摩展

多摩市立複合文化施設  
パルテノン多摩 特別展示室

2017.11.19 SUN - 11.25 SAT  
10:00-18:00 (土・日 17:00 閉場)

入場無料



東京都多摩市落合2丁目35  
京王線・小田急線・多摩モノレール 多摩センター駅下車 徒歩5分

主催: 多摩美術大学美術学部芸術学科 TAMAVIVANT II 2017 企画室  
共催: 公益財団法人多摩市文化振興財団  
協力: 多摩美術大学生涯学習センター 株式会社ハシimotoコーポレーション  
協賛: 靴のヒラキ TURNER COLOURWORKS LTD.

お問い合わせ: 多摩美術大学美術学部芸術学科研究室 〒192-0394 東京都八王子市滝水 2-1723  
E-mail: [tamavivant@tamabi.ac.jp](mailto:tamavivant@tamabi.ac.jp) TEL.042-679-5627 FAX.042-679-5649  
公式ホームページ: <http://www.tamabi.ac.jp/geigaku/tamavivant/2017/>  
Twitter: @tama\_vivant Instagram: tama\_vivant\_ii Facebook: Tama Vivant II 2017

足立篤史 タシロサトミ 張ピンナ 槇野さやか 松浦延年 矢成光生 山本愛子

多摩美術大学 渡辺達正教授 退職記念展

# あおの韻律

- さまざまな銅版画による表現 1969~2017 -

2017年10月21日(土) — 11月5日(日)

多摩美術大学美術館